

# 2

## 女化原開拓の歴史

「竹内農場西洋館」が建つ女化の地は、どのような場所だったのでしょうか。明治以前までは人の手の及ばない原野だった土地に、なぜ大規模な農場を作ろうとしたのか、その理由をさぐることで、地域の歴史と竹内農場西洋館が結びつきます。

### 狐伝説の原野を拓く

竹内農場西洋館建設の経緯を知るには、「女化原」開拓の歴史をまず、ひも解く必要があります。

龍ヶ崎市北部（旧八原村貝原塚と旧馴柴村若柴及び馴馬の一部）から牛久市南部（旧岡田村南部）にかけての一带は、かつて狐しか住まないと言われるような原野が広がり「女化原」と呼ばれていました。地域に伝わる民話「狐の恩返し」(囲み)を縁起にもつ女化稻荷（現女化神社）の縁日で賑わう以外、人気少なく、地域共同のまぐさ場として利用される程度でした。手つかずだった荒れ地が現在の豊かな畑地になるまでには、ここに入植した先人の大変な苦勞がありました。

### 西洋式大規模農法「津田農場」

女化原開拓は、和歌山県士族で明治政府の大蔵少輔などをつとめた津田出（1832-1905）がここに農場を開いたことに始まります。明治維新後、近代化を急ぐ政府は、殖産興業政策の一環として、伝統的な日本式農業を西洋式大農法へ転換しようと試みます。津田は「20年で開墾・植林すれば払い下げる」という条件で、茨城・千葉県内の官有地計 3000 町歩の原野を借り受け、開墾を始めます（図1）。

女化原は明治 11（1878）年に津田農場一番の広さ 700 町歩を持つ第七農場となり、主に四国から応募した小作人が入植します。政府による事前の調査では「水に恵まれ首府との便よく農業に向いた土地」という評価でしたが、実際は過酷な条件が重なる厳しい土地で



図1 津田出十八農場反別里程略図。女化原の第七農場は 18 の津田農場では最大、700 町歩（東京ドーム約 148 個分）の広さがあった。（『女化土づくりムラづくり苦闘百年』より引用）

した。関東ローム層のやせた赤土、筑波風の風害、そして度重なる干ばつや水害などに阻まれてなかなか実績が上がらず、小作人の生活は困窮し、土地を離れる者も多数ありました。現代のような技術や農機具、十分な肥料もない中での西洋式の農法には無理があったのでしょう。津田の農場経営はすぐに行き詰まります。18 の農場は次々と近隣の地主などに売却されました。

### 地元組合へ土地の払い下げ

津田第七農場の大部分は明治 30（1897）年、地元の女化組合に譲渡されます。彼らは払い下げのための条件と津田の募集で移住していた 60 戸の小作人を引き継ぎ、やがて国からの払い下げが認められました。土地や自然条件の厳しさは相変わらずですが、人々はそれでも希望を捨てず、信仰や教育を支えにコツコツと開



墾を進めます。そして工夫や努力が実り、次第にわずかなヒエ・アワ・<sup>おかぼ</sup>陸稻などが穫れるようになりました。

## 新しい開拓者たち

同じ頃、東京で「<sup>はちぶどうしゅ</sup>蜂葡萄酒」を製造販売し財をなした神谷伝兵衛（1856-1922）に津田第七農場の一部が払い下げられました。神谷はフランスで学んだワイン製造を日本でも実現させようと、ブドウ栽培に適している酸性土の土地を探していたのです。すでに開通していた日本鉄道土浦線（現 JR 東日本常磐線）牛久駅近くに神谷葡萄園を開園し、レンガ造りの醸造場・事務室（写真）・貯蔵庫などを建設しました。完成した日本初の本格的なワイナリー「シャトーカミヤ」（後の牛久シャトー）には皇族や当時の政財界の著名人が頻りに招かれ、宴が催されていたようです。招待客の中には自由民権運動の板垣退助（1837-1919）もいたことがわかっています。盟友・竹内綱は板垣の紹介で女化に縁ができた可能性があります。

シャトーカミヤの成功で「女化」の地は次第に在京の財界人・有力者の知るところとなり、土地を求める者が続々と現れます。明治末から大正にかけ、竹内農場を始め、岩村農場・伊藤農場・高松農場・林農場などが作られました（図2）。これら農場では、新しい技術と試みを次々と導入して開拓を進め、それが現在の豊かな女化の姿に通じているのです。



図2 農場位置図。女化原組合に払い下げられた津田第七農場の多くは、近隣や東京の有力者の手にわたり、小作人を入れての農場経営が行われた。『女化土づくりムラづくり苦闘百年』より引用)



写真 シャトーカミヤ旧醸造場施設事務室（岡田時太郎設計）。竹内農場西洋館より17年早い明治36（1903）年竣工。国の重要文化財に指定されている。

## 女化の民話「狐の恩返し」あらすじ

根本村の忠五郎は仕事の帰り道、高見が原の山道で猟師に鉄砲で狙われている白狐を見つけます。忠五郎の大きな咳払いで難を逃れた狐は、若く美しい女性に化けて忠五郎を訪ねます。八重と名乗った狐はそのまま忠五郎の家に居着き、いつしか二人は夫婦となって三人の子宝に恵まれました。

ある晩、長女は眠っている母親に狐の尻尾があるのを見てしまいます。自分の正体を知られた八重は悲嘆にくれました。そして「みどり子の母はと問わば女化の原に泣く泣く伏すと答えよ」と歌を詠み、高見が原の穴に隠れて二度と姿を現すことはありませんでした。

哀れに思った住民がそこに祠を建てました。以来、高見が原は女化原と呼ばれるようになったのです。女化神社の奥の院は現在も「お穴」と呼ばれ、石の祠が祀られています。



女化神社奥の院